

2024/4/14

ルカの福音書 講解メッセージ①

『ルカの福音書 1章 1-20 節 エリサベツに男の子が』

「私たちの間ですでに確信されている出来事については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。それによって、すでに教えを受けられた事がらが正確な事実であることを、よくわかつていただきたいと存じます。」（ルカ 1:1-4）

ルカの福音書は、テオピロという人物に宛てて書かれています。実は、この人物が誰かはわかっていないのですが、少なくともイエス様がこの地上に生きていた時代の実在の人物です。つまり、この手紙の内容は、当時の人々が認識していた事実に即したものであり、信ぴょう性が高いものです。もし間違った内容であれば、人々に受け入れることはなく、淘汰されていったでしょう。

さて、ルカは、イエス・キリストの福音を説明するにあたり、ヨセフとマリヤの話からではなく、ザカリヤとエリサベツの話から始めました。

■ ザカリヤに御使いが現れる

「ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行っていた。エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子がなく、ふたりとももう年をとっていた。さて、ザカリヤは、自分の組が当番で、神の御前に祭司の務めをしていたが、祭司職の習慣によって、くじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。彼が香をたく間、大ぜいの民はみな、外で祈っていた。ところが、主の使いが彼に現れて、香壇の右に立った。これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われたが、御使いは彼に言った。「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。」（ルカ 1:5-13）

ザカリヤとエリサベツは、子どもが与えられることを祈っていましたが、年を取り、すでに子どもを持つことをあきらめた状態にありました。そのザカリヤが、神に祈りを捧げているときに、御使いが現れました。御使いに会ったザカリヤは、喜びではなく不安と恐怖を感じました。それは、好きな人に対して、「私はこの人に愛されるだろうか」と不安を覚えるのに似ているかもしれません。神を愛し慕っているのですが、いざ神様が目の前に現れると、「こんな自分は神様に愛されるだろうか」と不安を感じてしまうのです。また、恐怖に襲われるのは、自分が罪人であることを知っているからです。私たちは、幼いころから罪を犯せば罰を受ける社会の中で生きてきました。そのために、罪を犯している自覚があると、恐怖を覚えてしまうのです。

この時、御使いが「こわがることはない。」と語ったのには、「私はあなたを愛している。私はあなたに罰を与えて来たのではない。心配はいらない。」という神の思いのすべてが表されています。

御使いは、ザカリヤに男の子の誕生を預言しました。この子がバプテスマのヨハネです。ザカリヤはすでにあきらめていましたが、神様は私たちの願いを無視することはありません。神の思いは、罪に罰を与えることではなく、私たちの願いを聞かれることがあります。ですから、神は私たちに、なんでも祈って求めるように教えておられます。ただし、それは、必ずしも私たちが願った通りになるとは限りません。なぜなら、私たちは自分の本当の願いがわかっていないからです。神は、私たちの願いや苦しみの本当の原因を知っておられるので、最善の道を示してくださいます。そのため、神の答えは私たちが予想したものとは異なる場合もありますが、神は、私たちの祈りに対して、すべてを働かせて益としてくださいます。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働くを益としてくださることを、私たちは知っています。」（ローマ 8:28）

■ 弱さに働く神

神は私たちの益となることしかなさいません。もし、自分が願ったものと神の答えとが違う場合は、私たちの益となるために、神があえてそうなさつたということです。その典型的な例がパウロです。パウロには持病があり、その病気がいやされるように熱心に神に祈りました。ザカリヤの場合は、祈ったとおり子どもが与えられましたが、

パウロには彼が予想した答えは来ませんでした。しかし、このことを通して、パウロは自分が本当に求めていたものの答えを知り、喜ぶようになりました。

「また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」(Ⅱコリント 12:7)

パウロには神によって素晴らしい働きが与えられていたため、傲慢になることがないように病気が与えられていたのだと、パウロは悟りました。「与えられていた」とは、神は病気を取り除くことができるのに、いやしてくれなかつたということです。病気というものは神から来たものではなく、サタンから来たものです。サタンとは、特定の人格ではなく神に敵対する運動のことです。私たちは永遠性という神のいのちを持っているにも関わらず、それを否定する世界で暮らしています。そういう運動を、聖書はサタンの使いとか悪霊の働きと説明しています。

つまり、私たちが病気になるのは、神の働きではありません。悪魔のしわざによってこの世界に死が入り込み、私たちを滅ぼす運動が入り込んだため、私たちの体は病気を覚えるようになりました。病気はサタンによって入り込んだものであるために、サタンの使いと言われているのです。

ある時、イエス様の弟子たちが目の見えない人に対して、「この人の目が見えないのは、この人が罪を犯したからですか。両親が罪を犯しからですか。」とイエス様に尋ねたことがあります。彼らは、目が見えないのは罪の罰だと考えていたわけです。しかし、イエス様は、それは罪の罰ではなく、神のわざが現れるためだと言われました。神のわざとは、私たちの不足を補うことです。もし、私たちの中に弱さがなければ、神のわざは必要ありません。人間の最大の弱さ、最大の不足は死です。神は十字架でそれを補い、永遠のいのちを与えてくださったのです。

つまり、困難や体の不調は、決して神の罰ではありません。それは神のわざが現れるためのものです。死の世界で生きている私たちには不足がたくさんあります。その弱さを神が補ってくださるのです。神が裁く対象は、人ではなく、この不足を人にもたらした悪魔です。罪・裁き・義についての私たちの理解は間違っているとイエス様は言われました。人間は神にとってさばきの対象ではなく、この死の世界にあってはただの病人です。神にとって私たちは癒しの対象であり、神の慰め・助けを受け取るべき存在なのです。

「このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」（IIコリント 12:8-9）

「三度も祈った」とは、熱心に祈ったということです。神は、私たちの祈りに対して、必ず答えをくださいます。パウロは、自分の病気がいやされないのは、弱さのうちに神の恵みが働くことを知るためだと悟りました。パウロは、病が癒される以上の答えをいただき、これこそ自分が求めていた真の答えであったことを知ったのです。神のわざは、私たちの弱さ・不足のうちに現れます。私たちが自分の弱さを認められなければ、キリストの十字架の贖いを知ることはできません。ですから、いかにして自分の弱さに気づくことができるかが大切なのです。パウロがこのことを喜ぶことができたのは、私たちを本当に苦しめているものは、目のまえにある困難ではなく、神との距離があることだとわかったからです。

ザカリヤが、御使いを見た時、不安で恐怖を覚えたのは、神と距離があったからです。神の側に距離はありません。しかし、私たちの側に距離があります。私たちはそのことに気づいていません。しかし、これが私たちを本当の意味で苦しめています。私たちの心は、神と一つになって生きるように造られています。聖書は、私たちはキリストのからだの器官であると教えていますが、私たちのほうが神から離れていたとしたらどうでしょうか。手が体から離れて生きていたら、手にとっては少しも幸せではありません。このように、私たちの不安、恐怖、苦しみの原因は、見えるところではなく、神との距離があるところにあります。「神を愛します、信じます」といつても、心に距離があればつらく感じます。

神との距離を縮める方法は、自分の弱さを認めることです。神の命令を実行できることではありません。神の力は弱さのうちに完全に表れるからです。弱さを認めなければ神との距離は縮まらないのです。この世界は、期待に応えてほめられることで距離を縮めようとしますが、それは神との距離をますます広げてしまいます。十字架は、弱さを補うためのものであり、私たちの弱さを象徴するのが罪です。罪の中にこそ神が働くのです。

■ 神は一人一人に計画がある

「その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖靈に満たされ、そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせます。彼こそ、エリヤの靈と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。」（ルカ 1:14-17）

これはバプテスマのヨハネのことです。神は一人一人に計画をもっておられます。バプテスマのヨハネだけが特別なのではありません。私たちは皆キリストのからだの器官として存在しており、神は一人一人に計画を持っておられるのです。イエス様がエルサレムに入城なさる時、誰も乗ったことのないろばを選ばれたように、人の目には取るに足らない者であっても、神は必要としておられるのです。ですから、自分に対する神の計画をしっかりと求めて、神と共に生きる人生を選択しましょう。

■ 患難とは神の励ましである

「そこで、ザカリヤは御使いに言った。「私は何によってそれを知ることができますか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっています。」御使いは答えて言った。「私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝えるように遣わされているのです。ですから、見なさい。これらのことことが起こる日までは、あなたは、ものが言えず、話せなくなります。私のことばを信じなかつたからです。私のことばは、その時が来れば実現します。」（ルカ 1:18-20）

残念ながら、ザカリヤは神のことばを信じることができませんでした。そこで、御使いガブリエルは、ザカリヤが信じられるようになるために、話せなくなるというしるしを与えました。話せなくなるというのは、一見、罰のように思えるかもしれませんが、これは罰ではありません。信じることができるようになるための助けであり、励ましです。パウロの病と同様、一見、患難に見えるものであっても、神は励ましの

ために用いることができるのです。神は、患難を通して私たちを碎き、神のことばが信じられるように導かれるのです。

つまり、患難というものは、私たちにとって喜ばしいものです。それをして神のことばが信じられるようになるからです。神のことばを信じられる喜びを体験すれば、それがわかります。

「それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることはありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:3-5）

私たちが欲しているのは、真の希望です。それは、揺れ動くことのない平安です。それが幸福であって、それを手にしたければ、患難というものを通過する必要があるのです。

なぜ人生に苦しみがあるのか、それはすべて私たちが真の平安・真の希望を手にするための通過点だからです。患難や苦しみにぶつかるということは、真の希望に近づいているのです。患難を通して、自分の無力に気づき、へりくだることができれば、弱さのうちに働く神の恵みと出会うことができるのです。それが真の平安です。

しかし、人は見える平安を求め、何かを手にすることが平安だと勘違いしています。子どもが、新しいおもちゃを買ってもらったらしばらくは喜びますが、すぐに別のものが欲しくなるように、自分が求めていた幸せはこれではなかったと気づくことを繰り返しています。この見える平安を求めるなどを繰り返すことで、人は患難を避けて生きてきました。しかし、自分に襲い掛かる患難や苦しみに真正面から立ち向かうなら、その先には真の希望があります。私たちが求めていた本当の幸せは、患難の先にあるのです。

「「神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と。それで、こう言われています。「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」」
(ヤコブ 4:6)

あなたが神の前にへりくだるなら、神はあなたに恵みを与えることがおできになります。

「嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」（ヤコブ 4:9-10）

私たちがしてきたことは、逆ではないでしょうか。神は私たちに、苦しんで悲しんで泣きなさい、つまり、自分が抱えている現実と向き合えと言っておられます。現実を見るなら、何をしても結局死ぬ私たちには希望はありません。この現実に嘆き悲しむなら、神の恵みが見えるのです。その弱さ、私たちの不足を補う十字架が見えてくるのです。

私たちは、どんなに良い行いをしたいと思ってもできません。この現実と向き合うのは、悲しくつらいことです。しかし、その現実と向き合うなら、神の前にへりくだることができ、神の恵みが見えてくるようになります。その現実と向き合おうとせず、見える喜びを目の前に持ってきて安心しようとしても、そこには本当の幸せはありません。

現実と向き合う勇気、つまり、絶望する勇気が信仰につながります。本当に神を愛して従う信仰を持ちたければ、絶望する勇気を持ちましょう。自分の不足に気づいて、足りなさを認めるならば、神の恵みが見えてきます。そうすれば、神への信頼が増し加わり、つぶやくことはなくなるでしょう。